

今回は、2年生の必修科目である、日本史Aの授業の様子をお伝えします。

「条約改正問題と江戸幕府とペリーとの交渉」というテーマで、授業は進みました。

まず条約改正に関わった人たちの動きを振り返り、その後、担当教員から、「とても苦労した条約改正であるが、江戸時代に締結した日米和親条約や日米修好通商条約は、江戸幕府がアメリカの武力を前にして一方的に押し付けられたものだろうか？江戸幕府の役人たちは、言われるままに条約を締結したのだろうか」と投げかけられました。



これまで授業で習ったことと江戸幕府代表のアメリカ応接係の、林復斎とペリーとの交渉記録などを参考にしながら、「開国の要求に対する幕府の対応について、あなたが林になったつもりで、ペリーに回答してみよう。」という問いか出されました。

ほとんどの生徒は、はじめペンが止まり、思案している様子でしたが、様々な回答が寄せられました。例えば、

「我が国は、以前は道義に反することをしていたが、今は漂着した者に食料や燃料を与えて無事に帰国できるように手助けをしている。貴国の望む国政へと日本は変わった。我々は貴国と戦う気はない」などと、回答をした生徒もいます。

自分が外交官であったらどのように回答するか、根拠をもとに考えるとすると、資料を確認する必要も生じます。

生徒たちは、教員に問われることで、教科書の出来事ではなく、自分事としてより深く考えることができます。

次回の授業では、生徒の皆さんがどのように回答したのか、さまざまな回答案を共有するとともに、実際の対応を伝え、外交の難しさを学ぶとのことです。

生徒たちが考えた回答を共有することで考え方の多様性を知ると同時に、実際の対応を学び、人間がどのように考え・悩み、その結果どう対応していったのか、外交という他の集団の駆け引きや決断を通じ、歴史が動いていく姿を少しでも自分事として考え理解を深めさせる授業でした。

次回の授業がどのような展開だったのか気になります。